

海老名弾正説教集

日本人のための福音2

新教出版社

東京大学図書館



0000051508

二つの流れが、当時のあらゆるものに向かって大破壊を試みた結果何もかも破れた。現代の青年の一面は破壊であるが、そこから言うると、維新当時の事に共鳴するものがある。明治初年は宗教より言うても、幾千百年の宗教に関するものを片端から打ち壊した。それは独り青年ばかりでなく政府もまた破壊者であった。政府は神道を助けて仏教を破壊せんとした。維新後まで、神社の御神体として仏像を飾ってあったものが尠くない。そこで、神体調べなるものをしたが、開いて見ると色々不思議なものがあつた、中には烏帽子直垂を着た仏像もあつた。恐らく僧侶の働いで神社を仏教化するつもりであつたらう、後に至つて神体を打ち壊した者は、キリスト信者だと言うが、何ぞ知らん偶像破壊の張本人は政府自身である。或る神社においては護符その他の供え物が幾度もなくなるので、神宮は驚いて調べてみると、御神体は猿であつたなどと言う話もある。かくして迷信も破壊されたが、同時に神々の威厳は地に落ちた。仏教の方面においては言うまでもなく非常な打撃を蒙つた。平野国臣の管見論を見ると、仏教があれば切利支丹が入ると言つて攻撃している。彼は十万の僧侶をことごとく還俗させねばならんという意見を有していた。そしてこれらの僧侶は誰を女房にするかというところ、全国に十万の娼妓があるからそれを充てる。さすれば同時に廃娼も出来るといふ一挙兩得の名案である。

明治初年に天つ神という言葉が用いられた。五カ条の御誓文には天地神明に誓うと仰せられてゐる。けれども時代は建設に力なくして、破壊に忙しかつた。善いことは迷信のなくなったことで、殊に若い者に取つて有難かつたのは化物のなくなった事である。世間は奇麗に掃除された。

その代り宗教も何もない。無神論が盛んになった。神も仏もない。地獄もない、したがつて極楽もない。実にさつぱりしたものだ。神も仏も何もかも神経の作用だと言う。いわゆる科学の時代である。かくのごとき時代であるから、私共は十一、二歳までは神を拝したが、それ以後は無神の世界に入った。

道德の破壊も恐ろしい。従来の形式道德は皆破壊した。その偉い人々はすなわち元老方である。自由結婚も今日くらいではない。思い切つた所まで行つた。親の貰つた者を離縁して、芸者とか、酌婦とか、給仕女とかいう者と結婚を仕直した。到底今の青年などの及ぶ所でない。私は十四、五歳まで芸者など言う者を見たことはない。女郎はなおさらである。それが維新後段々世の中に出来た。冠婚葬祭には、親類の女子供まで行くのが習慣だったから、どこの家にも五十人百人の膳部があつた。宴席が開かれると始めに謡曲があつて、それから吸物を喰べ、酒を飲む。酌は親類のお嬢さんがする。酒酣になる、奥さん方が三味線を持ち出すという風であつた。それが維新後料理屋で宴会をするようになり、芸者が段々勢力を得、男子は家庭を軽んずるようになった。日本を改革した者は浪人である。彼らは親も子も棄てて家を出たのである。出てから後、男は独りでおられない。彼らのなす所大抵察すべきである。

忠孝の觀念のごときも動揺して来た。私は武家の子であつたから、今まで君として仰いだ相手がなくなり、父母に対する態度すら変わった。同時に四民平等となつた。武士から言うると百姓町人のごとき者が勢いを得た結果礼儀もなくなり、美術も壊れた。音楽も壊れた。多年人心を支配

した儒教も壊れて、論語孟子は襖の下張りとなった。これは維新の結果である。その時代に私共は育った。勢いその影響を受けざるをえなかった。しかし破壊だけでは物足らぬ。長い間養われたいために、忠君の精神的要求がある。何ものか權威が欲しかった。また家庭から言う親は保守、子は進歩で互いの精神が疎通しない。子に欲する所があっても、親はその志を伸ばしてくれぬ。したがって親に対しても心苦しい所があって、寂しさを感じた。

そこでも少し尊いものがほしい。倫理道徳がほしい。私共は熊本にいたが、ちょうど小楠の弟子がいたのでその人々によって倫理道徳の道を教えられた。いわゆる致知格物によって、人となろうとしていた。その修養の間に宗教問題に触れた、後になっては科学は宗教に反するように見えたが、われわれはむしろ科学によって宗教に近づいた。物理学を読んでる時に、声のことがあった。声がどうして聞こえるか。音波の作用である。一秒に二十四から聞こえ出して、高い所は三、四万まで聞こえる。ということを読んだ時に、さらばそれ以上の所は誰も聞かぬか、以下の音は人の耳に入らぬのか、誰の耳に入るのか。かく考えて、一種神秘の世界を指さされ、音の世界は広い、われわれの聞く能わざるものを聞くものがありそうに思われた。また化学においては何もかも法則である。一として偶然ではない。私は宇宙に法則があることを知った時に、何とも言えない一種の尊敬を払わざるをえなかった。それから今の青年にはさまで共鳴せぬようであるが、非常に心を動かしたのは星学である。空にきらめく天の河は星の世界だと知った時に、宇宙の無限が展開して来た。その時の書物は、何時の間にか失ったので、後古本屋でさらに買って持

っているが、かくしてわれわれは新しい世界に飛び込んで行ったのである。

も一つは修養の世界である。儒教においては本心と私心との別がある。パウロの考えによれば理性と情欲との衝突である。理性を立てるか。情欲を立てるか、理性は本心の要求であるが、立ち難い。情欲は本心の願わざる所であるが、勢い盛んである。パウロがわが願う所の善はわれこれをなさず、願わざる悪はわれこれをなせりと言うて絶叫したが、私共幾度かく叫ばざるをえなかった。その中に儒教の天は、朱子の註である理性以上に、何かありそうに思われて来た。それが西洋で言うゴッドというものではないかと思われた。そして天が段々と生きて来た。孔子が天徳をわれに生ず、桓魋かんたいそれわれをいかにと言われたことや、罪を天に得れば祈る所なしと言われたことが味わわれて来た。けれどもいまだ宗教にはなれなかった。天を拝む気になれない。また祈りをする気にもなれなかった。その当時の考えでは、祈りは迷信である。御札の中に国家安全とか、何とか記してある、いわゆる御祈禱は堪えられぬ所であった。それでクリスチャンになってからも、祈禱という言葉を使わなかった、祈りと言った。しかしそれも友人が、祈りと言えば祈り殺すと言うからいかによというので、いやな連想のない英語でプレーヤーと言った。聖書に鬼という言葉があるが、鬼と言えば、赤鬼青鬼を思うて、一種厭な感じがする。地獄、これはもちろん大嫌いだ。そこで私共はいやな連想のない英語で、適當の言葉を研究した。私共は英語で信仰に入れたのである。

天は慕わしい。殊に理性の要求があつて、欲情を抑えて行くには、天にまで上がらねば満足せ

なかった。欲情の出で来る所を尊しと見る今の青年とは違う。もちろん維新時代にもその種類の人はあった。けれどもわれわれはこれに反動した。

かくして次第にキリスト教に近づいた。けれども進もうとして進み兼ねたのは、吉利支丹という言葉である。耶蘇という響は、何となく感情に障る。そこでクリスチャンと言ひ、クリスチャーニティーと言うた。色々の先入主があるために、それを破らねば信仰に入れなかった。われわれが聖書を研究し始めた時は、クリシタン禁制の札の漸く取り下ろされた時である。今日とは違って、種々なる妨げがあった。けれども内心の要求がある、どうかして誠心の儘に行きたいと願った。であるから何とかして、天というものを突き止めようとしたが、宗教のことは友人にも話せない。もし言えは絶交されるから独り苦しんでいた。それは私ばかりでない。友人も黙して考えていた。この苦痛を秘密にして研究した事約二年である。

ところが私の生涯において、動かすべからざる実験が現われた。ある土曜の夜、ジェーンズ氏の宅で論究会のあった時のことである。何時もジェーンズ氏は祈りをしたが、この夜は特に祈りする時「立て」と言うた。われわれはジェーンズ氏を非常に尊敬していたから、友人たちはそろそろ皆立った。けれども私は祈れないに立つというは堪えられぬ。短い時間であるが、非常に苦しんだ。ところがまた一面から言うとうわが心には開かれつつあるものがあった。それは報恩である。君の恩、親の恩は、生みつけられていたので、天に対して恩を謝する考えはあった。けれども天に願うというは間違っていると思った。しかるに立てと言われた。暫く立たずしていたが、

私は私として天に謝すればよいと考えて遂に立った、これなれば儒者でもなしていたことである。ジェーンズ氏は聖書を読み終わった時、謹厳な態度で、祈りについて一言したいと言われた。非常な感激であった。そして祈りは造物者に対するわれわれの職分であると言われた。私には全く光が見えた。ああ、私は職分を怠っていた。済まないことをした。職分であれば膝も曲がる。頭も下がる。どんな事でもする。一体自分が神より作られた身分でありながら、自分一人でいるのは間違ひである。トレミー説のごとく自己中心であった。神は私の周囲にあって、私はこれを使うのごとく考えていた。それが神中心となった。コペルニカス説となった。天体の考え方が変わったと同じく根本から考え方が違った。ここに至って全く平身低頭した。言うて見ると子供の時教え込まれた忠君、頭の前から足の爪先まで教えられていたその考えが、大名のなくなったために、対象を失っていた。親がこれに代わって中心になるかと言うと、それも行かぬ、知らず識らず自己中心になっていた。それが神の命を聞いて動くものとなった。私は全然ひっくり変わった別の人間となった。内面生活から言うと、私はこの時初めて王政維新をやったのである。それまでは、私の良心は権威なくして、かえって私欲私情が権威であった。良心の王はこれまでパッションのために苦しんだ。それが王政維新において、良心に権威が生じた。神を主君として私の職分を自覚した時、初めて良心がオーソリティーを得た。非常に嬉しかった。これは私の生涯における新生である。私の信仰は、良心が神と結ばれて権力を回復した。救われたという言葉が嫌いであったが、非常に偉い所へ引き挙げられた。祈りについても祈りは神との交わりであると言われた時

に、何と有難いものかと思つた。宇宙の主宰であり、上帝である神と交わると言うは実に偉いことである。権利と言うか、賜物と言うか、何とも言われない。

私は先に済まないと思つたと言つたが、さらに神に対して忠節を尽くさんとした。私と神との間に電線が通じたような気がした。一々神の御思召しいかんということが先立った。誠に天と自分とが近くなつた。この実験をしたのがそもそもキリスト信者になつた始めである。

それから以後、祈りを始めたが、しかしこうしてくれ、ああしてくれということは注文せなかつた。ただ神の御思召しを受けて、職分を尽くさんとした。その後何でも出来るようになったと言わぬけれども、儒教に対する態度が定まつた。すなわち儒教を浅薄と見たのである。私は誠意誠心をもって修養してどうしても得られないものが、一度神と結ばつてから、良心がパツションを支配する力を得た。ことごとくなし得たのではないが、成りつつあるのである。クリスチャンと成つて四十七年になるが、この実験だけは動かない。確かにクリスチャンとしての根本を作る。けれどもいまだ天の父と仰ぐ心にはなれなかつた。神を主君と仰ぐ態度である。神に信頼する赤子の心情でなくして、神は君で、私は臣である。君臣の道德的關係である。したがって私は忠臣として神に仕えんとした。この実験は、倫理的宗教であつて、罪を赦されたとか、救われたとかいふ意識ではない。言わば理性の対象となつた時、満足した宗教である。これが自分に取つては信仰の入口である。

二

動播時代をいかにして切り抜けたかという実験を申し上げる前に、それ以前の経験を言わねばならぬ。一体私の信仰経験は、次第次第に進み来たように思われる。すなわち一の実験があつて、また次の実験に入ったものである。私がクリスチャンになつたと考えた時の感想は世捨人である。パウロもキリスト信者になつてから、独りアラビアに行つて瞑想し、祈つていた。その有様はさながら、バプテスマのヨハネに似たようである。キリストも洗礼後野に行かれた。私はアラビアにも荒野にも行かなかつたが、世捨人となつた。しかして凡人であるから、試験の時期は長い。決して四十日や三年ではなかつた。しかしその間が生涯の根柢となつてゐる。どうして世捨人の気分になつたかと言つと、今までの友も眞の友でない、自分より以外に私のような経験をした者が無い、先生もジェーンズの外はその経験はないと思つたからである。

幸いにして信仰を言い表わした所、同様の経験をしている者が五六人ある。その人々もまた世捨人の感があつた。われわれはこの世においては宿れる者である。話をしても話題が違ふ。気分が違ふ。何もかも違つてゐる。沢山のクリスチャンと共に生活しておればそういう考えはない。四方八方に友がある。けれども当時は自分たちは世捨人の気持であり、自然精神状態は内観に入つていて、ただ神と親しんだ。前には、土曜日曜などには天下のことを談じた者が、今は山に行つて、独り静かに祈りをするようになった。その時分に愛読したものは詩篇である。詩篇には世